

「もの・しるし」図式ではなく、「もの・さしし・しるし」の三角形が取り出される。二つのものが無媒介に対立するのではなく、両者を橋渡しするものが現れたのである。ここに、内なる言葉の言語哲学的意義がある。アウグスティヌスによれば、内なる言葉は真理を認識しようとする働きであって、内面性に閉じ込める主観性ではない。真理を認識するために、memoria, intelligentia, voluntas は共働する、その結果、内なる言葉が生まれる。その限り、内なる言葉は三一構造をもつのである。

しかしその深く豊かな内面性にもかかわらず、否まきその内面性の故に、内なる言葉は外へと向けられ、声によって具体的に語られることを求める。内なる言葉は意志伝達の領域におけるしるしを求め、vox によって具体的に指示・言及 (referre) されるのである。このようにして、『三位一体論』において、「内なる言葉」の意義が明らかにされ、vox significans の積極的な働きが認められることによって、res と signum は固く結び合わされるのである。

以上のように、本書の著者は『三位一体論』における言語哲学的問題の重要性を終始一貫して強調する。我々は更に res と内なる言葉との関係を掘り下げて考察する必要がある。

## 山田 晶著『トマス・アクィナスの《レス》研究』

創文社、1986年、V+979頁

宮内久光

「存在とは何であるのか」とは問われても、「存在」(エンス)と同一であり可換的であるとされる「もの」(レス)について、「ものとは何であるのか」と問われることはきわめて稀である。敢てこの問題に真正面から取り組んだのがこの大著である。しかしトマスはレスを自明なものとして前提し、これを主題的に取り上げておらず、研究文献も皆無に近い。そこで自ら取られる方法も定まってくる。トマス自身のテキストの中でレスとの関係を有する重要な概念としてエッセンチアとカウサとラチオを選び、さらに

エッセンチアとの関連においてアリストテレスのプラグマとウシアの概念の解明にまでさかのぼって、さまざまな連関のもとにトマスが取り上げているレスの性格をできるだけ明かにすることである。

著作全体は12の論文から成るが、それを一、「プラグマとレス」二、「ウシアとレス」三、「被造のレス」四、「キリストのレス」五、「レスとラチオ」の五つの項目にまとめ、「トマス・アクィナスにおける《レス》の規定」「神の存在論証における《レス》の問題」の二論文を付論とする構成を取っている。一においてはレスがその訳語であるプラグマの語原的意味をアリストテレスの「詩学」に即して探究し、ついで「命題論」における個別的なものと普遍的なものに区分されるプラグマの意味、および同書と「カテゴリー論」におけるプラグマとヒュポケイメノンとの関係が論じられる。二においてはアリストテレスのウシアを構成する三つの性格、自存性、可知性、実在性に基いて二つのウシアすなわち個別の実体と普遍の意味が検討され、ウシアとレス、エッセンチアとの関係が論じられ、さらにエッセンチアを表示するいくつかの名とレスとの関係が論じられる。三においてはレスの原因の問題が扱われ、神の知と意志とを原因とするレスの意味が問われ、レスの個別性が強調される。四では人間理性を超えた「見られないもの」がヘブル書とトマスの解釈を通じて検討され、五においては中世哲学におけるレスとラチオの対比の問題点が、そのギリシア哲学的起原、および近世以降の西洋哲学におけるレスのラチオへの解消という歴史的展開をふまえて論じられる。レスをシグナムとの関係において把えるアウグスチヌスの伝統と、ラチオとの関係において把えるアリストテレス・トマスの伝統が区別され、それが二つの神学の形態を形成する原因となっていることが示される。

全体を通じて論旨は明確であり、テキストと文献を縦横に駆使してその透徹した読みは深く正確である。テキストに即した豊富な註はテキスト理解に多大の教示を含み、著者の永年に互る研讀の成果が遺憾なく発揮されていて教えられるところ大であった。心からの敬意を表したい。またトマスの立場に立脚したアリストテレス解釈およびトマス自身の著作の読解は独立した註釈としての価値を持つものと言えるであろう。さらにこの著作の視野は遠く中世全体に及んでいて、所謂普遍論争の問題やエッセとエッセンチアの区別の問題のような歴史上に名高い諸問題の解明にも大きな光を与えるばかりではなく、近世以降のデカルト、カント、フッセル等の哲学の批判をも含み、トマスの存

在論の現代における意義を問うものであって、単なる歴史的研究に留まるものではない。またこの著作の大きな特色は、神学と哲学を形相的に区別しながら両者の断絶を認めなかったトマスに倣って、レスの解明を深めるに当たっても神学的思索が色濃く浸透していることである。この点については大きな問題を含むものであり、多少の異論もあるが、ここでは立ち入らない。

この著作の意図するところは人間知性が第一に、最も知られたものとして把握するエンスと可換的であるレスの意味を限定し深化することであったと言えよう。したがって最も広い意味における存在、すなわち一切のものに内在することによって一切のものを超越するエンスから出発する存在への問いは真に存在の名に値いする存在、真の実は何であるのかという方向に深められるのに対応してレスの探究も、すべてを包含することによってすべてを超越する最も広い意味における「もの」としてのレスから出発して *simpliciter* にレスの名に値いするレスは何であるかを問うことであった。探究の帰結は、端的な意味で「レス」と言われるのは自然界に確定したエッセを有するものである、ということであり、アリストテレスのウシアの解釈を通じて「個物」としてのウシアがトマスの場合に「レス」という語によって表示される、ということであった。したがってエンスと置換されるのは個物としてのレスである。エンスはエッセとエッセンチアから合成されているゆえに、個物としてのレスもエッセとエッセンチアから合成されている。この場合エッセンチアは個物たるレスに内在し、レスをレスたらしめている実在的内在根原であり、エッセは個物としてのレスを個物として存在せしめている個物の内在根原である。しかも、レスの有するエッセンチアは、知性がレスからさまざまなラチオを取り出す根原であり、レスについて知性によって形成されるラチオの領域はいかなる意味でもレスの領域の中に解消されない独自の領域を成す。

以上の帰結を導く論理の筋道は説得的であるが、それならば一切を包括する筈の広義のレスはいかに理解すべきか、という疑問が自ら生ずることも否定できない。もとより著者は十分にその問題を意識しているのであり、レスの領域の意味を拡大し、たとえばエッセとエッセンチアがそれ自体としてはレスではないが、リアルなもの (*reale*) として、その実在性 (*realitas*) を承認する。

その意味で二つの付論が重要な意味を持つものとして注目される。それはこの論文が

或る意味で上述の帰結の批判的反省となっているからばかりでなく、そこにおいてトマスにおける存在と人間的認識に関わる根本的な問題が露わにされるからである。

第一の論文は上述の帰結と逆の方向を取る。まず魂の外にレスが在り、それは確定したエッセを有する *res naturae* である。それに対応して魂の内なるラチオも魂の外なるレスに依存するものすなわち *res rationis* として承認される。さらに *res immaterialis* としての人間知性が *res naturae* に組み込まれるばかりでなく、魂の内なる *conceptio* もそれが *passio* である限り、魂の外にあるものの領域に属するとされる。最後にラチオも魂の内に在るものではあっても、独自の確定されたエッセを有する限りレスと呼ばれうると考えられることになる。

このようにして、認識を存在の問題として把握するトマスにおいてレスとラチオが意味するものが何であるのか、という問題に読者は更めて直面することになる。

第二論文はトマスおよびアンセルムスの神の存在論証におけるそれぞれのレスの二義性を問題にしている。トマスの論証はレスの存在、実在の確認から出発する。このレスの特徴は、それが有限の存在者である、ということである。しかしレスの第一原因としての神と呼ばれるものは無限なるものであって、レスの世界に実在しないゆえにレスであるとは言われえない。一方の在り方を実在と言えれば他方は実在とは言われえないのである。アンセルムスにおいてもレスは二義的である。それゆえに、いずれにしても神の実在は論証されないことになる。このようにして超越の可能性とアナログアの問題をレスの意味と共に更めて問い直すことを迫ってこの大著は閉じられることになる。

---

### 川崎幸夫著『エックハルトとゾイゼ』

関西大学出版部，1986年，323頁

中山善樹

本書は著者が京大卒業以来、一貫して取り組んでこられたドイツ神秘主義に関する既刊の諸論文を集めたものであり、それぞれ年代順に、1.「エックハルトの根本問題」、2.「現代世界とエックハルト」、3.「生死の問題とマイスター・エックハルト」、4.「不